§**5.5.**: p.(75) = –564– 補遺 (18.7.2015)

可能性としては,

印欧祖語段階で，連続するまたは一語に合成された（盈階梯の）*$\hat{k}erd + d^heh_1$, 例えば*$\hat{k}erdd^heh_1$-（おそらく*$\hat{k}erdzd^heh_1$-）に，3（ないし 4）子音連続回避のため，*$\hat{k}redd^heh_1$- (*$\hat{k}redzd^heh_1$-) という異形が生じ，これから*$\hat{k}red$ が抽出された，という想定がやはりあろう。ただし，インド・イラン語派に見られる*$\hat{g}^herd$/*$\hat{g}^h\text{r̥}d$ の語頭子音の起源は未解明のまま残る。

訂正:

śraddhā́-，*crēdō* の語義と語形について　　　　(75)

*k̂r̥d-	＞ラテン語（中性）*cor*，*cord-is*，古教会スラヴ語（中性）*srьd-ьce*，ギリシャ語（女性）*kard-ía*，イオニア *krad-íē*，ヒッタイト語（中性）*kard(i)-*
*k̂ḗrd-	＞ギリシャ語 *kē̃r*（中性），リトアニア語（二次的に女性）*šird-ìs*，ヒッタイト語（中性）*kir(ti)*
*k̂ḗrd-i (Lok.)	＞ギリシャ語 Dat. *kē̃r-i*，アルメニア語 *sirt* (Nom.)
語頭の子音を異にして（中性）:	
*$\hat{g}^h$ḗrd-	＞古インドアーリヤ語 *-hā́rd-*（*su-°*，*dur-°*）
*$\hat{g}^h$ḗrd-i (~~Lok.~~)	＞古インドアーリヤ語 *hā́rd-i* (~~Lok.~~)　H. H. Nom.-Akk.
*$\hat{g}^h$r̥d-	＞古インドアーリヤ語 *hŕ̥d-*，*hŕ̥d-ay-a-*，古アヴェスタ語 *zərᵊd-*，新アヴェスタ語 *zərᵊδaiia-*
*k̂érd-on- ＞	ゲルマン語派：英語 *heart*，ドイツ語 *Herz* など

5.5. これらを総合すると，印欧祖語において，「心臓」を意味する語に ①*$\hat{g}^h$ḗrd-/*$\hat{g}^h$r̥d-，②*k̂érd-/*k̂r̥d- の中性名詞２語形が復元される。さらに，アップラウト（Vollstufe の実現位置）を異にする ③*k̂réd- が想定されることになる。その際，②から，拡大形ないしは派生形を用いて「心臓」を意味する語が作られていること（ギリシャ語 *-$i̯eh_2$-，ケルト語派 *-ih_2ó-：「...をもつ，に由来する，属する」？）を重視するならば，*k̂érd-/*k̂r̥d- の背景に，「心臓」と深く関係するが「心臓」そのものとは異なる語彙があった可能性が考えられる。そこに ③*k̂réd-が，もともと心臓に依拠する何らかの精神機能（→1.4.）を謂う語であった可能性が浮上する。すなわち，「信念，確信，信」のような働きが考えられる。

このように仮定すると，②*k̂érd-/*k̂r̥d-「心臓」は ①*$\hat{g}^h$ḗrd-/*$\hat{g}^h$r̥d- を，Vollstufe の母音位置はそのまま受け継ぎながら，語頭の子音を ③*k̂réd- に合わせて変えたものと説明できる。

アヴェスタ語 *zraz-dā-* には，逆方向の平均化がおこり，古インドアーリヤ語の *śrád＋dhā* から想定されるインドイラン共通祖語 *k̂réd-d^heh_1- から，語頭の子音を *$\hat{g}^h$r̥d-＞イラン祖語 *zr̥d-「心臓」（＞古アヴェスタ語 *zərᵊd-* などなど）によって変えたものと説明できる。[19]